

A Study on Tsuga Teishou, Writer of Yomihon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42252

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

読本作者都賀庭鐘の研究

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

Studies on Tsuga Teishou, Writer of *Yomihon*

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 木越 秀子

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 西村 聡

〈Abstract〉

Alongside his profession as a Confucian doctor, Tsuga Teishou (1718~1792) is the author of various *yomihon*. These works - *Hanabusa-zoushi* (1749), *Shigeshige-yawa* (1766), *Hitsuji-gusa* (1781) - reveal an extensive knowledge of Japanese and Chinese classics which, coupled with Teishou's evidential methodology, makes them esoteric. While I analyze selected tales from all three texts, the main focus is on the most obscure *Hitsuji-gusa*. This obscurity, I argue, is also because of Teishou's adoption of Kogidou school's literary worldview, something evident in the prefaces of *Hanabusa-zoushi* and *Hitsuji-gusa*.

The outline of my dissertation is as follows: (1) biographical research; (2) textual analysis; and (3) understanding his literary method. Although Teishou's biography is sketchy because of the lack of historical sources, I attempted to account for one crucial period by utilizing records of meetings with prominent figures during his trip to Kyoto. Textual analysis reveal that many narrative themes derive from historical evidence, often showing Teishou's interest in political governance. His characters are complex and elaborate; as an author, he often stands by the weak. Crucially, there is a shift in compositional method. While *Hanabusa-zoushi* was composed by adapting Ming vernacular tales (*hakuwa/baihua*), sources of latter works were from Japanese oral narratives or overlooked texts.

〈学位論文要旨〉

本研究は都賀庭鐘の短編小説集『莠句冊』について、小説作りの方法を視点として作品研究を行ったものである。

都賀庭鐘（1718～1792 頃）は儒医を本業とし、かたわら『康熙字典』の校刊を行うなど、文事にも業績があり、小説も書いた。

彼の短編小説集『英草紙』（1749 刊）は読本の祖とされ、他に『繁野話』（1766 刊）、『莠句冊』（1787 刊）がある。これらは庭鐘が若いころ作ったおよそ 30 篇の小説をもとにしており、合わせて"庭鐘の読本三部作"と呼ぶこともある。

庭鐘は儒医として漢籍に詳しく、また中国の白話小説を好んだ。そのため彼の作品はこれらから材をとったものが多く、どれも広範な和漢の知識が鏤められ、また、これに考証が加えられている。そのため彼の作品はあとのものほど難解とされ、『莠句冊』の研究が『英草紙』『繁野話』より遅れている。そこで、本研究では『莠句冊』の作品研究を目指す、それ以前のものである『英草紙』、『繁野話』についてもみておく必要があると考え、いくつかの作品を取り上げ、論じた。

ところで、『英草紙』には『新編日本古典文学全集 78』（小学館、1995 刊）に中村幸彦氏による注釈と現代語訳、『繁野話』には『新日本古典文学大系 80』（岩波書店、1992 刊）に徳田武氏による注釈が備わっているが、特に難解とされる『莠句冊』についてはまだそのような注釈が行われていない。

そのためか、これまでに発表されている『莠句冊』に関する成果の内には、典拠についてはともかく、必ずしも本文の正確な読み取りがなされているとは言えない場合もある。本研究では、まず文意を正確にとらえることで新しい読みを提示し、そこから見える都賀庭鐘の小説作りの方法をまとめた。

論文は、三章と付論からなる。

第一章では都賀庭鐘の伝記研究を行った。

伝記記述のための庭鐘についての資料は乏しい。本来大坂人の庭鐘は若いころ京都に遊学している。主として医学修学のためと考えられるが、そこで医学の師香川修庵、風流人大枝流芳、書家新興蒙所と出逢った。彼らとの交流が庭鐘に大きな影響を与えたと考え、香川修庵の賀寿の集、庭鐘が大枝流芳の著書に送った序、庭鐘作の新興蒙所の墓碑銘、また、庭鐘の弟子と見られる秋成の言葉などを手がかりに、庭鐘と彼らとの関係を探り、庭鐘の伝記の一部を明らかにした。

第二章では作品研究を行った。

『英草紙』では第一篇・第三篇・第七篇を取りあげた。庭鐘の作品に知識や考証をテーマとしたものが多いが、第一篇はその例となる。本篇は『警世通言』所収「王安石三難蘇学士」を原話とするもので、原話自体学識比べや考証をテーマとしており、庭鐘はこの原話をその後二度も用いている。知識や考証を盛り込むのにふさわしい形式であるからと考えられる。ただし、この一篇からは知識が道を誤らせるという考えも読みとれる。

『英草紙』第三篇でも雅楽に関する知識の披露があり、街学的と評される。しかしこの篇では緻密な取材方法により原話「俞伯牙摔琴謝知音」（『警世通言』および『今古奇観』所収）とは違った人物造型を行い、原話のテーマが「友情がなにより大切」であるが、それとは違って「命運」をテーマとした作品に改変している。

『英草紙』は中国白話小説を典拠とするものが多い。その中で、第七篇は典拠が日本のものであり、『英草紙』の作品中では異色のものである。『繁野話』にこれと同じ典拠・趣向をもつ作品(第九篇)があり、この第七篇は『繁野話』の作品作りの方法を先取りしたものといえる。

『繁野話』はその序で、日本の散逸しそうなものを小説にし、後世に伝えたい、と宣言している。

第一篇は謡曲、御伽草子など日本のものの趣向を取り入れ、また歌語も多く用い、序で行った宣言を決行したかに見える。ただし、『警世通言』所収「蘇知県羅衫再合」を典拠とするという見方もあり、すっかり日本風という訳にはいかないようである。なお、『繁野話』刊行の翌年に出された『民用晴雨便覧』（天文書、中西敬房著）に影響を与えており、「後世に伝える」という願いが早速かなっている。

『莠句冊』では第一・三・五・七篇などを取りあげた。

第一篇では前置きに、仙人の存在を主張する道教についての考察が見られる。この部分は林羅山著『本朝神社考』の仙人説を修正しているものとなっている。また、そのあとの人魚放生譚は巷間の噂を元にしておりと考証し、『繁野話』の小説作りの方法を踏襲している例と考察した。

第三篇は求塚にまつわる話をいくつか並べたものである。

これまで本篇に見える求塚にまつわる話は三話とされていた。これを、構成から見て、序、結びと四話からなると考察した。また、文中に見える「酒色財氣」はこの篇のキーワードであり、この語の典拠は先掲「蘇知県羅衫再合」の入話（前置）である、と考察した。「蘇知県羅衫再合」では、入話で「色」と「財」の物語を語ることを宣言して正話に移る。『莠句冊』の本篇ではこれにならい、「色」と「酒」、「色」と「財」、「色」と「気」の物語を作っているが、「気」が最も大切だと主張する。このことから、篇中の第四話の「色」と「気」の物語が庭鐘の最も書きたかったものであると考察した。この第四話は、国家永続を願う忠臣たちによる政治改革をテーマとした物語である。

第五篇では構成法、第七篇ではその典拠などについて考察した。

第三章では、序文について考察し、庭鐘の文学観を探り、また各作品の作法について考察した。

『英草紙』『莠句冊』の序文からは、庭鐘の文学観は古義堂の儒学に拠っていることが読み取れる。

古義堂の文学観を二つにまとめると、①詩、広く文学は人の情を道（い）うもので、それにふれ、共感することで、人格が完成されていく、②読み手の能力の差で読み方に差が出る、というものである。

『英草紙』の序文では、人情を尽くす『源氏物語』を読み『徒然草』の説く高い境地に至ることができる、文学は道を求める人の教えとなる、と説く。また、『莠句冊』では、市井に隠遁し、読みたいと思う人のために小説などを書くが、そこから何を読み取るかは読者次第だ、と説いている。

香川修庵の医学は儒医一本説を唱えたが、修庵は儒者伊藤仁斎に学んだ。庭鐘もまたその影響を受けていることは十分考えられる。庭鐘は儒の道を修めるために小説を書き、自分の全力を尽くしたことが各作品集の序文から読みとれる。庭鐘の興味は知識や考証にあったことは確かであるが、儒者として弱者に心を寄せ、国家の運営・経世済民にも興味をもっており、作品にそのようなテーマを読み取ることができる。

付論では、庭鐘の弟子と自ら任じる上田秋成への影響について考察した。また、後期江戸読本の『南総里見八犬伝』（馬琴作）の一部を取りあげ、庭鐘の作品作法との共通点を論じ、庭鐘の読本の特徴について考察した。

以上が本研究の内容である。

本研究で『莠句冊』の作品研究を一步進めることができたと考える。しかし、先述のように、庭鐘の小説作品はどれも難解であり、特に『莠句冊』は難解である。まだまだ解明できていない部分が多い。『莠句冊』についての研究が進めば、今より高い評価を受けるのではないかと考える。

学位論文審査報告書

平成27年 1月30日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 木越 秀子

2 学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

読本作者都賀庭鐘の研究

3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 西村 聡 印

委員 上田 望

委員 鏡味 治也

委員 杉山 欣也

委員 高山 知明

委員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は江戸中期の読本作者都賀庭鐘^{つ が ていしゅう}の読本三部作、『英草紙』^{はなぶさぞうし}『繁野話』^{しげしげ や お}『莠句冊』^{ひつじく き}を研究の対象とし、難解とされる各篇の読解を更新して（第二章）、三部作に共通しかつ深まりを見せる小説作りの方法を（第三章）、作者に影響を与えた同時代人たちとの交流（第一章）や中国白話小説から民間口碑に至る典拠の探索・比較（第二章・第三章）を通して解明しようとした論文である。400 字詰め原稿用紙に換算して 1000 枚を超える力作であり、対象作品のひとつひとつが難解であるだけでなく、参照すべき文献が先行研究を含めて膨大な量に上る困難によく耐え、それ自体も難解な和漢古今の諸資料を渉獵して、随所で通説を修正する新見を提示し、当該研究分野に貢献する具体的な成果を挙げたことが評価される。

第一章では、第一節で大田南畝^{なんぼ}の都賀庭鐘評を引いて上田秋成や曲亭馬琴へと続く近世小説史上の位置を確かめた後（本論文付論には『雨月物語』『南総里見八犬伝』の一部を論じている）、資料の乏しい都賀庭鐘伝について諸説を検討し、若き日に医学を志し、中頃医師・小説家（中国白話小説を教材とする中国語学者の意）・筆道者として知られ、晩年には儒家と目された庭鐘が、それぞれの分野でだれに師事し影響を受けたかをつきとめようとしている。その結果、儒医一本説を唱えた香川修庵から儒学と医学を、香道家大枝流芳から漢詩文と風雅な生活を、能書家新興蒙所^{にゅうもう}から書を学んだと見て通説を補強するとともに、従来不明とされる唐話の師は修庵の高弟大潮^{だいちゅう}である可能性を探り、大田南畝の評を踏まえて上田秋成は儒者庭鐘を人生の師と仰いでいたことを指摘する。これらの伝記考証は三部作の作者庭鐘についての理解を深め、作品の題材や人物造型などへの投影を論ずる前に確認すべきこととして、ここに配置されている。なお、考証の結果は章末で「都賀庭鐘略年譜」の形に整理されている。

第二章では三部作所収の各作品、——『英草紙』全 9 篇の内、第一篇・第三篇・第七篇を、『繁野話』全 9 篇の内、第一篇を、『莠句冊』全 9 篇の内、第一篇・第三篇を論じている。『英草紙』第一篇については、その「逃水」説の典拠の検討を行い、「まとめ」では中国白話小説の「王安石三難蘇学士」（『警世通言』所収）がこの第一篇だけでなく『莠句冊』第四篇でも利用されていることの意味を考察して、原話の持つ「知識・考証」のテーマを利用した小説作りであるとの見方を示している。「逃水」説と「知識・考証」のテーマのそれぞれは穏当な解説たり得ているが、論文構成上は両者を独立させた論じ方（後者を第三章第二節で詳論するなど）もあり得たと思われる。

『英草紙』第三篇を論じた第二節は日本近世文学会の学会誌『近世文藝』91 号（2010 年）

に投稿・掲載された論文を増訂してここに収めている。『英草紙』の各篇は中国白話小説をそのまま翻案した印象の作品が多いが、本論文では原話の「愈伯牙摔琴謝知音」（『警世通言』『今古奇觀』所収）との細かな差異を丹念に比べて、原話とはテーマの異なる庭鐘独自の小説世界が作り上げられていることを論証している。豊原兼秋（原話は愈伯牙）・横尾時陰（原話は鍾子期）の二人の登場人物の内、『樂家録』などにも未見、あるいは創作人物として片付けられてきた後者について、その『樂家録』に横尾姓が見いだされ、また『體源鈔』の笙の相伝系図に「時」の字のつく名が、しかも作中で源義家から琵琶の相伝を受けたという、その源義家の周辺に多く見いだされることを指摘し、横尾時陰は豊原兼秋（実在の人物）をしのぐ音楽の天才として造型する意図で仮構された名前であったとする。原話の「知音」は後世懇意な友人の意に用いられたが、原話の文字通り「音を知る」意を庭鐘は秘曲を解し（時陰は琵琶が専門なのに^{きん}琴の、しかも秘曲を解する）、その音に世の中の存亡吉凶を聞き取る人物に適用して、原話の意味を原話以上に強調し、さらに兼秋が時陰の墓前で弾く琴の音の聞こえ方を、原話の「鏗鏘」（^{こうしょう}美しい音の意）を引用した上で「つやなきひびき」の左注を添えて「^{おもしろげ}興趣なき」意に転用し、原話では愈伯牙が悲しみの場で楽しみの楽器を奏でる場違いを見物が笑うのに対して、『英草紙』ではすでに廃れた琴の音自体が見物を笑わせ、そこに兼秋が「時運の命」を感じて琴を砕くのであり、原話のように「知音」の友がいないから琴を砕くのではない。本論文はそれらのことを明らかにして、原話そのままの翻案に和漢音楽史の調査結果を加えたという通説を大きく修正する成果を挙げた。

『英草紙』は全9篇中8篇までが中国白話小説に原話を求めることができる。本論文第二章第三節では『兵家茶話』という国内の文献に取材した唯一の作品第七篇を詳しく分析し、同書を利用する『繁野話』第九篇との類似を指摘して、国内に埋もれる卑説臆談の類を取り上げると序文にいう『繁野話』の小説作りを先取りしたとの見方を示す。続いて第四節ではその『繁野話』第一篇を論じ、その雲に関する所説が翌年刊行の『民用晴雨便覧』に採用された事実から、序文にいう卑説臆談の類への着眼を認め、また「日本化」における謡曲・御伽草子への意識に注目している。さらに第五節では『莠句冊』第一篇の八百比丘尼伝説が口碑に取材した可能性に言及し、『繁野話』で目指した方法の実践と見ている。そして第六節では『莠句冊』第三篇の「求塚第一説神靈問答」の「酒色財氣」について、これを「酒・色・財氣」と分け、その三つが世俗の物語の主要な契機と読む通説を批判して、「酒・色・財・氣」の四つが第三篇の契機となっていること、中でも「氣」が小説作りに最も重要との考えは『警世通言』巻十一

「蘇知県羅衫再合」の入話（前置き部分）から得たとする。確かに「蘇知県羅衫再合」の入話は『繁野話』第一篇でも利用され、そこでは李広の詩をめぐる「酒・色・財・氣」四人の精女が現れた（第四節）。『莠句冊』第三篇は今後、本論文の見解を踏まえた読み直しが進むものと思われる。

第二章におけるこうした作品各論の検討を経て、第三章では庭鐘の小説観と小説作りの関係、その特徴と深まりを三部作の序文と編集傾向から把握しようとしている。『英草紙』の序文は中国白話小説集『照世盃』と酷似することがすでに指摘されているが、『照世盃』では小説を教訓・啓蒙の手段として擁護するのに対して、『英草紙』では古義堂（伊藤仁斎）の文学観を踏まえ、文学に表現することで人格を形成し、儒の道を学ぶ気概で創作するという立場が表明されていると見る。不遇の知識人、典型的な文人が後ろめたさを感じながら小説作りをしていたとする通説に見直しを迫る視点を提示したことになる。『繁野話』の序文は唐代傳奇集『虞初志』の序文からの影響がすでに指摘されている。その影響のもと、庭鐘は『英草紙』の原話依存から卑説臆談の類（伝聞・口碑等）を取材源とする方向へ向かう。そして三部作の中でもとりわけ難解とされる『莠句冊』では、古義堂の文学観に立ち努力を重ねた結果として小説作りの力量が上がったと見られ、また序文でも「古今奇談」の摘み残し（「莠」はひこばえの意）を材料として、その寄せ集め方も複雑となった旨が述べられている。

本論文はここまでを第三章第一節とし、第二節では第二章で取り上げなかった諸篇も視野に入れて、三部作それぞれの小説作りの方法が整理されている。解説・分析の対象作品を増やして、ここまで論じてきたことを補強する節であり、緻密な人物造型、弱者へのエール、卑説臆談への取材、知識・考証・経世済民のテーマへの関心などを例証し、中には『繁野話』の第四篇、『莠句冊』の第五篇など、それだけで独立した論文たり得る内容を備えた部分も含まれる。付論における上田秋成・曲亭馬琴への論及とともに、問題を体系的に解明したいという意欲の表れと見受けられる。

全体に表記の不統一や誤脱が散見すること、節ごとの論証に達成度の差がやや大きいこと、問題の提示のしかた・まとめ方にさらに工夫が必要なことなど、改善の余地はあるにしても、難解とされる三部作に果敢に取り組み、時間をかけて確かな解説の成果を列記した本論文が、今後の庭鐘研究に新しい基礎を提供したことは疑いなく、博士（文学）の学位を授与される水準に到達した論文であると認められる。